

特集**多様な立場から考える食の科学技術
—ゲノム編集技術に着目して—**

科学技術開発が加速的に進められるなか、一般市民はその仕組みを知らずに生活に取り込んでいることが多い。新しい技術によって生活が向上するかもしれないし、逆に社会や人間を崩壊させていく可能性もある。総論では、私たちが科学技術とどのように向き合う必要があるのかをお二人の研究者にご提示いただいた。そこでは、科学者だけではなく、市民や利害関係者を含む多くの人がコミュニケーションを図る重要性が示されている。

そこで特集では、2019年10月から表示義務なく市場に流通させることができるようになったゲノム編集技術を用いた食品について、科学者だけでなく、消費者側、生産者側がどのように捉えているのかを読者の方に知っていただき、多角的に科学技術を考える機会を提供したいと考えた。そのため、まずはゲノム編集技術などには頼らずブランドの養殖鯛を生産している生産者や関連業者の方々、消費者の視点として生活クラブ、制度設計に関わっておられたNPO法人の方、そしてゲノム編集技術に携わっている科学者にお話をうかがった。

本特集では、ゲノム編集技術がいかなるものかを提示するのではなく、それに関連する人たちがそれぞれの立場で、何

を目的に、どのような考え方のもとで関わっているのか、またリスクや安全性をどのようなものと捉え、技術開発や生産に取り組んでいるのかということを読者に伝えることに主眼を置いている。

既に多くの生協では、ゲノム編集技術に関する学習会などには取り組んでおられるが、なんとなくしっくりきていない方も多いように思う。そのため、技術開発に携わる科学者だけでなく消費者・生産者の考え方を聞くことが必要であると感じ、本特集を企画した。実際に両者の考え方を直接聞くことで、科学者と生活者（消費者・生産者）の間に大きな乖離が見えてくるのではないだろうか。技術開発は、技術開発そのものに目的があるのではなく、技術を使用する生活者のためにあるということが重要だと考えられる。そのため、社会に応用する際にはそうした生活者の視点を重視することが求められるのではないだろうか。巻頭言で中村桂子先生が述べているように、私たち人間も自然界に生かされた生物の一員であり、そして生活があり地域がある。「安全性」だけに注目されることが多いが、それを越えた議論を丁寧にした上で社会に取り込むのかを決める必要があるように思う。

（本研究所研究員 青木美紗・片上敏喜）